

軍記物語の女性たち (10)

日野富子の生涯 —『応仁記』より—

岡崎 嘉彦

日野富子は永享12(1440)年、山城国(京都府南部)に生まれる。室町幕府の足利将軍家とも縁戚関係を持っていた名門日野家の女子として何不自由なく育てられる。康生元(1455)年、16歳で幕府将軍足利義政の正室となり、長禄3(1459)年に第一子が生まれるが、子どもがその日のうちに夭折したことで、富子は長らく政敵であった今参局いままいりのつばねが呪いを掛けたせいではないかと疑う。そして、今参局を琵琶湖の沖島に流罪とし、義政の側室四人を追放する。それからは、政治に興味を示さない夫に代わり、幕政に深く関わり影響力を行使していく。文正元(1466)年に富子は義尚を出産するが、それまで跡継ぎがいなかった義政は僧籍にあった弟の義視よしみを還俗させて将軍後継者としていた。これに対し富子は、後見役の山名宗全や日野家の権威を背景に義尚を将軍に推し、義視と対立する。これに幕府の実力者である細川勝元と山名宗全の対立などが起こり、応仁・文明の乱が勃発する。富子は戦乱で国が疲弊する中、京都七口に関所を作って関銭を徴収し、米相場や高利貸しなどから賄賂を受け取るなどしていた。そして、幕府の財政は富子の財力により賄われていた。人々は彼女の利殖行為に対し、批判を強めていく。政治や権力に貪欲な母富子と不和になった義尚はその後若くして死に、次いで夫義政が没すると、富子は義視の子で義政の養子となった義植よしたねを将軍職に擁立する。しかし、富子は義植にも反発されると、堀越公方足利政知の子、義澄を将軍に就け発言力を維持する。富子の晩年は近江で過ごし、明応5(1496)年に57歳で死没。蓄えていたと思われる巨万の富が彼女の手元に残っていた痕跡はなかった。

日野富子という人物像は悪女や守銭奴という評価をされることが多い。確かに義弟義視を廃し、我が子義尚を将軍職へ就け、戦乱へと導き困窮

する庶民を顧みず多額の金品を蓄財し、多くの非難や妬みを買っている。だが、彼女が自らの私利私欲だけで利殖行為を行っていたかは疑問である。彼女が政治へ介入する原因として、夫の義政が饑饉によって人々が飢えているにも拘わらず、「花の御所」を造営するなど幕府の財政と人心を顧みない悪政を敷いていたため、富子は幕府を運営していくための資金として数々の利殖に手を伸ばさざるを得なかった事もある。また、守銭奴と呼ばれた反面、火災で朝廷の御所が焼けた際には、修復のための莫大な費用を自らの蓄財から捻出するなど朝廷を気遣う思いもあった。

夫と子が亡くなった後は、悲しみに暮れるそぶりもなく、幕府の運営や人事に発言力を行使していく。そうした行動からは彼女の政治への強い執着心が垣間見える。自らの発言権を維持し、幕府の根幹を支えていた富子にとって、権力は唯一の心の拠り所だったのかもしれない。夫や我が子にも離反され、悪女の名を後世に残すなど、決して世の男性に好かれる女性とは言えなかった富子。しかし、夫の死後も権力の中枢に居続け、幕府への影響力を保ち続けたのは、偏に彼女が教養を身に付け、政治の駆け引きに優れていたからではないだろうか。

このように、その評判は決して芳しいとはいえない富子だが、彼女の人生には波瀾の時代を駆け抜けた女性としての一抔の悲しさも覚える。富子が本当に求めていた幸せとは、もしかすると金や権力ではなかったのかもしれないが……。

■主な参考文献、そして、今回おすすめする本

- 宗光 [写] 『応仁記・永禄六年鈔』龍門文庫 1986年。
- 鈴木良一著 『応仁の乱』岩波書店 1973年。

おかざき よしひこ (司書・情報サービス課)